

わたしたちは、8月に入って、今日まで4回、ヨハネによる福音書を読んできました。それは、イエス様が行なった、5つのパンと2匹の魚で五千人の人々を養った出来事の意味を知るための学びでした。

ところが、ヨハネによる福音書6章を最初から見て行くと、イエス様の不思議な奇跡を見て、最初は大勢の群衆が集まっているのですが、命のパンの説教をしているうちに、人々はつぶやき始めます。そして、今日の福音書のあたりになると、群衆の大半はいなくなり、今まで従ってきていた弟子たちの多くも、去って行くということが起こります。

群衆や、そして多くの弟子たちが期待していたことと、イエス様が伝えたいことの間には、大きな開きというか、違いがあったのでしょうか。

当時の群衆にとって、指導者がパンを増やす、というのは、大変象徴的な出来事でした。聖書をよく読んでいた彼らには、すぐに思い出す話がありました。列王記下4章の終わりです。

イエス様の時代より850年くらい前、北イスラエル王国に、エリシャという預言者がいました。この人が、大麦パン20個で百人の人々を養い、百人は食べきれずに残した、という話があるのです。預言者とか、王様とかいう人々は、頭に油を注がれて、その仕事に就くのですが、この油注がれた人のことを、メシアと呼んでいました。私たちがイエス様に対して使う、救い主とか神の子とかという意味のほかに、メシアとは指導者という意味で、一般的に使われていたのです。

そのお話を人々は知っていたのでしょうか。「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言った、ということが、パンの奇跡の後で、出てくるのですが、そのあとで、人々は、イエス様を王様にしようということになるのです。

預言者や王様は、頭に油を注がれた人（つまりメシア）なんです、それはあくまでも人間なのです。人々は、イエス様のことに注目していますが、それはいくら立派な指導者でも、人間としてしか、理解していません。

イエス様の説教を聞いて、人々が、「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか。」という発言にも表れています。

結局、人間には、自分にとって都合のいい人を英雄にして、その人を利用して、甘い汁を吸いたい、というところがあります。自分たちに食べ物を与えてくれるなら、その人がエジプトの王様として、自分たちを奴隷のように扱ってもいい、という立場です。食べ物のためなら、魂を売ってもいい、みたいなところがあるのでしょう。

それは、目先のことに振り回されて、物事の本質を観る目がない、ということ、という風にも見ることができないのではないのでしょうか。

もう10年以上前になりますが、作家の五木寛之という人が「下山の思想」という本を出して、話題になったことがありました。

人生を山登りにたとえるなら、皆さんは頂上に立つのが最終目的と思っておられるかもしれませんが、実は山登りは、頂上に立った時、やっと半分終わっただけなんですね。後の半分は、安全に山を下らなければならない。そして、その山を下ること、下山こそ、人生の意味を知るのに大切なプロセスだ、と五木さんは言うのです。

そしてまた、この日本という国も、下山の途中にあるのではないか。昭和7年に生まれた五木さんは、戦後の日本が高度経済成長のために必死で働いて、経済大国になるために、山の頂点を目指して登って来た。しかし、今は人口も減り、経済状況も下り坂である。下山の時を過ごしているんだ。登る時は、目の前の道を頂上目指していたので、他に何も見えなかったが、下山の時には、いろんなものが見えてくる。遠くの景色も、そして自分の生きてきた道や目指すこれからのことも見る余裕ができています。

ところが、私たちは相変わらず、登山のつもりで、目先のことにだけに囚われてしまっているのではないかと五木さんは指摘します。コロナウイルスを経験した後、国民の生活は、ますます苦しくなっています。現在は、五木さんが本を書いた時よりももっと目の前のことにとらわれています。

イエス様を取り囲む人々のことを、ヨハネの6章あたりでは、「群衆」と呼んでいます。これは別の言葉では、「民」とも言えるでしょう。

五木さんの本によると、五木さんは、この「民」という言葉が嫌いだそうです。この「民」という言葉を象形文字として分析すると、これには、「目を針で刺すさまを描いたもので、目を針で突いて見えなくした奴隷をあらわす。物のわからない多くの人々、支配下におかれる人々の意となる」という辞書の説明を引用していました。

そして、五木さんは戦争や、原発で翻弄された人々のことを例に挙げます。

『第二次世界大戦中、国民は戦争がどのような状況にあるのか、知らされぬまま国に従っていた、いわば奴隷だった。そして、現在の日本もそうではないか。原発事故で大変な放射線が出ているのに、その情報も知らされずに、福島原発周辺の人々は、危険な方向に逃げることになってしまいました。そしてそれは、指導者にも、やはりあてはまることで、目先の利益だけを考えていたので、自分たちの置かれた立場を考えずに、一気に大震災の津波に呑みこまれ、大きな事故を起こしてしまった。』と言います。『日本は下山途中に、東日本大震災という大きな雪崩に遭遇してしまった。』と五木さんは言うわけです。

私は、池上彰著「超訳 日本国憲法」(新潮新書)という本を読んで、改めて知らされたのですが、こんなことが書かれていました。

『憲法は、国家の最高法規。いろんな法律の親分のようなものです。ただし、一般の法律の多くが、国民が守るべき内容を定めているのに対して、憲法は、「その国の権力者が守るべきもの」なのです。』

10年前、今まで認められていなかった集団的自衛権を、政府が勝手に新しい解釈をして、それを認めることになりました。国家権力を制限するためにある憲法を、その改訂をするわけでもなく、解釈を変えるということは、国民の自由と権利を侵すことになるのではないか。憲法の下に政府があるはずなのに、いつの間にか、政府が憲法をコントロールしているかのような有様が現在の状況です。

だから、今こそ、わたしたちは、世の動きを見て、正しい判断をする、賢い眼をもたなければならないのではないかと私自身も思います。それは、エゼキエル書などで述べられている「見張り」の役目だと思います。第二次大戦下の日本基督教団戦争責任告白などでも引用されました。

モーセやイエス様は「人はパンだけで生きるものではなく、主の口から出るひとつひとつの言葉で生きる」と批判されました。目先のパンより大切なものがある、ということでしょう。

モーセは、神様がイスラエルの人々をずっと見守ってくださっていることに気づきなさい、と教えたのですが、イエス様の場合は、ご自分のことを神様が天から降らせた、本当に人々を導く言であり、かつ人々を養う命のパンである、ということまで、踏み込んで言われているのです。

こんなことは、大群衆を構成している一般のユダヤ人にはとても理解できないことでした。

確かにイエス様の言われることは、当時の人々には理解することが大変困難な、難しい教えだったのでしょう。頭で理解しようとしても、とても理解のできることではなかったのではないかと。だから、大勢の弟子が去ったのですが、しかし残ったペトロたちは信仰告白をしています。

『6:67 そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われた。6:68 シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。6:69 あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。』

弟子たちは、イエス様の存在に触れて、十分には理解できなくても、やはり自分たちには真理と命の言葉であるイエス様が与えられて、この方に従う生き方が大切であると悟りました。そしてこのように告白し、命の道を歩いたのだらうと思います。

多くの仲間が去ってからも、ペトロたちが付いて行った、イエス様の歩まれた道に信頼して、私たちも歩むことが大切なのではないでしょうか。そして、覚めた目でこの世を見て、神様のみ心を行なう者として成長したい。そして、私たちは今日も、イエス様の御言葉に活かされ、霊的なパンに養われる信仰を続けたいと思います。